



山登如

2020年度

付中通信第4号

## コロナ禍の教育その1

2020.5.15

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

脱線ついでもうひと話

先生の楽しいことって何？

授業の雑談中、いきなり生徒に問われて答えに窮した。『楽学』が本校の学びの精神だと長年説いてきた校長が、ここにきて言葉が出てこないとは。

仕方がないので、光市の冠山総合公園の満開のバラの美しさに魅せられて、気に入ったバラの苗を買って家の庭に植えた話をした。たぶん生徒には退屈な話にしか聞こえなかったにちがいないし、話すそばから自分でも何が楽しいものかと反駁していた。場がしらけてくるのを肌で感じた。

後になって、バツの悪さを回復すべく、自分の中に「楽しい」感覚が薄れてしまっている理由を改めて考えてみた。要するにこれはマスクが原因だと、思いついた。

コロナ禍にあって、3密回避の象徴はマスクである。ここでは、私たちは口を中心に顔の3分の2近くをマスクで覆い隠し、目だけが異様なまでに強調される生活を強いられている。



コロナ禍、令和2年度の運動会は中止が決まった

欧米人はマスクをしたがらないとよく言われてきたが、今回ついに折れてしまった。命には代えられない。感情を目元よりも口元に読み取ろうとする彼らにとって、口元を隠すことはマナー違反に近い。目だけでは不気味でやり切れないという感覚らしい。

日本人も目から口へ

他方、「目は口ほどにものを言う」とは「黙して語らない」日本人の性格の一端を端的に表してきた。他人の目を見て心の奥底を見透かす民族にとって、本来、マスクは本望だったかもしれない。

しかしそれはもう過去のことだ。人生かなり長くなった世代に属する私でももう耐えられないからだ。もはや日本人が「目」を頼りに以心伝心を図ることに長けているとはとても思えない。

そういう意味でも日本は十分欧米化したと言えるかもしれない。少なくとも私は地域から生活から感情が消えて見えなくなったような感覚に襲われつつある。つまり、楽しい感情もマスク越しにはなかなか生まれないというわけだ。 （続きは次号を待て）